

展示と地域を結ぶ巡回展「地球時間の旅」

糸魚川フォッサマグナミュージアム 学芸員 香取 拓馬

1. はじめに

新潟県糸魚川市にあるフォッサマグナミュージアムは、ヒスイやフォッサマグナなど、大地の成り立ちをテーマとした地質系博物館である。1994年に開館し、2015年に大規模リニューアルを行っている。2008年に糸魚川ジオパークが誕生して以降、当館は同ジオパークの中核施設としての役割も担い、教育活動及び交流人口の拡大に貢献してきた。2020年には、地域ESD活動推進拠点に登録され、市内外の教育機関に質の高い教育機会を提供している。

2023年、文化庁の博物館機能強化事業（Innovate MUSEUM事業）「ネットワーク形成による広域等課題対応支援事業」に採択され、全国の博物館およびジオパークのネットワークを活用し、地球の歴史と私たちの暮らしとの繋がりをテーマとした巡回展示を制作した。制作した巡回展は、2024年から全国を巡回している。本発表では、ネットワークを活用した展示物の制作プロセス、展示と地域を結ぶ新たな巡回展スタイル、それら活動の成果について報告する。

2. 博物館とジオパークの新たなネットワーク

1) ジオパークネットワーク

ジオパーク活動の目的は、特徴的な地質遺産とそこに息づく生態系や育まれてきた人々の歴史と文化を保護・保全し、それら地域資源を教育・防災・地域振興等へ活用することにある。世界ジオパークの活動は、2015年にユネスコの正式事業となり、2024年3月時点で48カ国213地域が認定されている。日本では、2009年に国内初となる世界ジオパークが誕生し、2024年10月時点で47地域が日本ジオパークに認定（うち10地域はユネスコ世界ジオパークにも認定）されている。ジオパーク活動の大きな特徴は、ネットワークの強さにある。国内全てのジオパーク地域は、日本ジオパークネットワークに加盟し、日々の情報共有を通じて互いの活動の質を高め合う習慣が根付いている。

2) 博物館とジオパークの新たなネットワーク

博物館は、世界中の標本と手軽に出会える機会を来館者に提供するとともに、学びを深化させる空間的演出を施すこともできる教育施設である。しかし、展示されている天然標本は、ある地域のある対象物の一断片に過ぎず、来館者は展示標本とそれに付随する解説文以上の

情報を得ることはできない。理想的には、博物館で対象物に関心をもち、その対象物の産地(地域)を訪れ理解を深めることができれば、質の高い教育機会につながる。博物館の多様な価値の創出が求められる現代において、博物館内で完結する学びから、学びの起点となる博物館を目指すことは、博物館のプレゼンス向上に資する可能性を秘めている。

全国 47 のジオパーク地域には、自然科学あるいは考古・歴史学的価値のあるサイトが保全・整備されており、そこには解説板があり、パンフレットがあり、アクセス路がある。また、それらサイトと関連した風習・信仰・食・住宅様式・産業などの暮らしがそこにはあり、そのつながりを来訪者に伝えていくことがジオパークの大切な活動である。したがって、博物館で芽生えた知的好奇心を、地域で体験し楽しむ場所としてジオパークは最適である。当館は、博物館とジオパーク両方のネットワークを持っている。両者の強みを活かし、学びの起点となる博物館機能を実現するため、全国 14 の博物館、25 のジオパーク、その他 4 の団体(学術連合など)でプロジェクトチームを結成し、巡回展示を制作した。

3. 展示と地域を結ぶ巡回展「地球時間の旅」

1) 巡回展示の制作

巡回展示は、計 4 回の研修会を通じて制作した。まずは、それぞれの館・地域が保有する代表的な地域資源(標本やサイト、地質学的背景・生態系・歴史・文化などとの関り)をストーリーカードにまとめ、互いの地域資源を理解することから始めた。

地質標本館(茨城県)で開催した第 1 回研修会では、21 地域から収集した約 100 枚のストーリーカードを使い、巡回展示のストーリーをデザインした。お題は、巡回展示の一部である日本列島の形成史を、どんな章立てで(構成)、誰に(標本やサイトなど)、どのように(演出)語ってもらおうのかとした。全国各地のユニークなストーリーや登場人物を組み合わせ、1つの物語を編んでいくイメージである。全国の標本を駆使して、他の館・地域の学芸員などと共同して展示ストーリーを編んでいく作業は新鮮で、互いの知識や経験を共有することができ、今までにない地域間のリンクを数多く発見することができた。

国立科学博物館(東京都)で開催した第 2 回研修会では、第 1 回研修会で構築した展示ストーリーをもとに、展示パネルの素案を制作した。作業は、巡回展の 4 つの章ごとにグループを分けて進め、最後にワールドカフェ方式で各グループの内容をフィードバックし、各章のつながりを確認した。馴染みのない地域のストーリーを織り交ぜながら、伝えるべき情報を洗練させていくワークは、学術的正確さを保ちながら、分かりやすい文章にまとめる良いトレーニングとなった。

桜島ビジターセンター(鹿児島県)で開催した第 3 回研修会では、観覧者の意識変容を促す展示表現をテーマとした。巡回展示の最終章では、過去と現在の地球について知り、気候変動や地質鉱物資源の枯渇など、未来について考えるきっかけを意識している。桜島ビジター

センターでは、桜島の火山活動の性質を伝え、防災意識の向上（観覧者の意識変容）を促す展示が施されている。この関係に類似した世界規模の課題が、気候変動や地質鉱物資源の枯渇であり、巡回展示の具体的な参考になると考えた。研修会では、桜島ビジターセンターの展示を見学し、観覧者の意識変容を促す展示表現について意見交換した。

フォッサマグナミュージアム（新潟県）で開催した第4回研修会では、巡回展示の試作品を実際に設営し、パネルやレイアウト、空間デザインなどの改善点・工夫点について意見交換した。また、設営・撤収時の注意点などについても共有し、巡回展運用マニュアルの基盤とした。意見交換の内容は、展示物のブラッシュアップに活用した。

計4回の研修会には、のべ181人のプロジェクトメンバーが参加した。研修会後のアンケート調査では、約80%の参加者が研修会の内容に非常に満足と回答し、展示制作プロセスに関するノウハウ、博物館とジオパークの相互理解、グローバルな視点からローカルの価値を見出すスキルアップにつながったと考えている。



① 第1回、② 第2回、③ 第3回、④ 第4回研修会の様子

2) 巡回展示の構成

巡回展示は、「ツナガル・カラフル・ツクル・ツタエル」の4章構成となっている。

第1章「ツナガル」は、地球が育む私たちの暮らしをテーマとした。桜島（鹿児島県）の火山灰土壌で栽培されている桜島大根、南アルプス（長野県）の高山帯に隔離分布するライチョウ、アポイ岳（北海道）のかんらん岩地にのみ生育する植物固有種、流紋岩質の巨岩・ゴトビキ岩をご神体とする神倉神社（和歌山県）など、身の回りの農作物や動植物、信仰が大地の成り立ちとつながっていることを紹介している。

第2章「カラフル」は、見慣れた風景を形作る地質の多様性をテーマとした。玄武洞（兵庫県）の玄武岩、秋吉台（山口県）の石灰岩、長瀨岩畳（埼玉県）の結晶片岩など、有名な

風景写真とそれを形作る岩石標本をセットで展示し、風景が形作られた地質現象について紹介した。また、岩石標本とセットで岩石薄片の偏光顕微鏡写真も展示することで、様々なスケールからみた岩石の多様性を視覚的に楽しめるよう工夫した。

第3章「ツクル」は、日本列島の形成史を3つのフェーズに分け紹介した。最初のフェーズは、日本列島誕生前の大陸縁辺時代（約2,500万年前以前）で、当時の海に生息していたアンモナイト化石（北海道）や、大陸の地下で形成された片麻岩（島根県）などの標本を展示した。2つ目のフェーズは、日本列島が誕生した日本海拡大期（約2,500万年前～260万年前）で、当時の海底火山から噴出したグリーンタフ（秋田県）や、日本列島の中央部にあった日本海と太平洋をつなぐ海峡・フォッサマグナの海に生息していたホタテ貝の化石（埼玉県）などの標本を展示した。最後のフェーズは、現在の地形が形成された時代（約260万年前以降）で、北アルプスの急速な隆起を物語る花崗岩（富山県）や、1万年前以降に起きた地球最大の噴火の火砕流堆積物（鹿児島県）などの標本を展示した。

第4章「ツタエル」は、暮らしを支える地球環境の変化と、それを伝えるジオパーク活動をテーマとした。現代の必需品ともいえるスマートフォンには、多くの希少金属とプラスチックが使われていること、それらの原料となる地質鉱物資源を地球が生み出すのには長い時間がかかっていること、海水温の上昇に伴い採れなくなっている海産物があることなどを、全国の具体的な事例を交えながら紹介した。また、それら課題に対して活動している団体の取組も紹介し、来館者に世界規模の課題を自分事として考えてもらう工夫を施した。



巡回展示物。① 第1章「ツナガル」、② 第2章「カラフル」、
③ 第3章「ツクル」、④ 第4章「ツタエル」

その他、地質鉱物資源と暮らしのつながりを楽しく学べる展示として、ジオ発見ボックスを制作した。これは、引き出し式の什器で、天板上の亚克力ケース内には身近な製品が、

その下の引き出しには製品の原料となった岩石標本が収納されているハンズオン展示となっている。小さな子どもにも、自分で発見する楽しさを体験してもらいたいと思い制作した。

下記に巡回展示の標本一覧をまとめる。標本の多くは、プロジェクトメンバーが所属する館・地域で所有しているものである。

巡回展示の標本一覧

標本名	産地	時代	所蔵・提供
かんらん岩	北海道様似郡様似町	新生代古第三紀 ～新第三紀	様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会
玄武岩	兵庫県豊岡市	新生代第四紀	山陰海岸ジオパーク推進協議会
石灰岩	山口県美祢市	古生代石炭紀	Mine 秋吉台ジオパーク推進協議会
チャート	長野県飯田市	中生代白亜紀	飯田市美術博物館
結晶片岩	埼玉県秩父郡長瀬町	中生代白亜紀	埼玉県立自然の博物館
ホルンフェルス	高知県室戸市	新生代新第三紀	室戸ジオパーク推進協議会
片麻岩	島根県隠岐郡隠岐の島町	古生代ペルム紀	一般社団法人隠岐ジオパーク推進機構
アンモナイト	北海道三笠市	中生代白亜紀	三笠市立博物館
グリーンタフ	秋田県男鹿市	新生代新第三紀	男鹿半島・大潟ジオパーク推進協議会
チチブホタテ	埼玉県秩父郡	新生代新第三紀	埼玉県立自然の博物館
ムラヤマホタテ			
花崗岩	富山県黒部市	新生代第四紀	富山市科学博物館
火砕堆積物	鹿児島県鹿児島郡三島村	現代	三島村・鬼界カルデラジオパーク推進協議会
黒曜石	北海道紋別郡遠軽町	新生代第四紀	白滝ジオパーク推進協議会
ヒスイ	新潟県糸魚川市	古生代カンブリア紀	フォッサマグナミュージアム
琥珀	千葉県銚子市	中生代白亜紀	銚子ジオパーク推進協議会
玉髄（碧玉）	島根県松江市	新生代新第三紀	出雲玉造資料館
石灰岩	愛媛県西予市	中生代	四国西予ジオミュージアム
火山灰	鹿児島県鹿児島市桜島	現代	桜島・錦江湾ジオパーク推進協議会
珪藻土	宮城県刈田郡蔵王町	新生代新第三紀	蔵王ジオパーク推進協議会
方鉛鉱	宮城県栗原市	新生代新第三紀	栗駒山麓ジオパーク推進協議会
クロロプレングム	-	現代	市販
火山灰染め製品	-	現代	市販
七輪	-	現代	市販
鉛蓄電池	-	現代	市販

3) カメレオン型巡回展

制作した巡回展は、2024年3月から全国巡回をスタートしている。2024年12月現在、10会場での開催が終了しており、2026年3月までに他25会場での開催を予定している。ジオパーク地域の中には、博物館などの展示施設がない地域も多いことから、巡回展示物はサイズを変えて3セット（床面積：> 120㎡、80㎡程度、50㎡程度）を制作した。受入希望館・地域と相談しながら、3セットを同時に全国巡回させている。

本巡回展の大きな特徴は、基本セットに“あそび”を設け、開催館のオリジナル展示を追加することが前提となっている設計にある。基本セットでは、全国的かつ自然科学・考古学・歴史学・風習・信仰・食・産業・環境問題と非常に幅広いテーマを概要的に紹介している。開催館には、それらテーマの中から地域性を表現できるトピックを選び、深掘りするようお願いしている。すなわち、基本セットはケーキのスポンジ部分で、その上のデコレーション

は開催館に委ねるスタイルの運用である。そうすることで、開催館ごとに発見のある、色合いが変わる巡回展（カメレオン型巡回展）の実現にチャレンジしている。実際、これまでの開催館では、会場内でゲンゴロウが泳いでいたり、地域の産業や酒作りを紹介したりと、プロジェクトメンバー間でも予想できない多様性と地域色が表現されている。合わせて、各館・地域の学芸員などを派遣し合うトークショーを開催したり、展示物と関連したツアーを開催したりすることで、地域間のつながりを直接伝える機会を作り出している。

4. まとめ

本巡回展で焦点を当てた地球の営みと暮らしのリンクを可視化することは、自然科学系博物館が社会に向け発信し続けるべき大きなテーマであり、全国の博物館・ジオパークスタッフと議論できたことは大きな財産となった。また、展示と地域を結ぶ博物館の在り方について探究できた点も良かった。博物館の多様な価値の創出が求められる現代において、博物館内で完結する学びから、学びの起点となる博物館を目指すことは、社会における博物館のプレゼンス向上に資すると考えている。そのような展示と地域の結びつきを強化する上で、展示ノウハウのある博物館と、現地訪問の受入体制が整備されているジオパークの親和性は非常に高く、両者をつなぐネットワークは、今後ますます有効に機能すると考えている。本巡回展では、全国14の博物館と25のジオパークからなるネットワークを生み出すことができ、展示制作という1つの目標に向かって継続的に活動することができた。この取組が、今後の博物館とジオパークの横断的な連携や、博物館機能強化の進展に寄与することを願う。

2024年8月、下北ジオパーク（青森県）で開催された日本ジオパーク全国大会にて、「現地に行きたくなる展示表現とは？」と題した分科会を開催した。本巡回展制作で蓄積した、展示と地域（現地）のリンクは、パンフレットやガイドブックの制作、来訪者へのガイディングなど、展示以外のジオパーク活動にも活かされていくことが期待される。また、同9月にベトナムで開催されたアジア太平洋ジオパークネットワークの国際会議では、巡回展示の英語概要版を展示した。海外関係者からの反応は非常に良く、同様の巡回展示を共同で制作したいという問合せもあった。全国を旅するごとに色変わりしていく巡回展を楽しみながら、各開催地の経験の蓄積と共有を継続していきたい。

関連サイト

ジオパーク巡回展「地球時間の旅」特設 HP <https://earthtime-journey.geopark.jp/>

ジオパーク巡回展「地球時間の旅」PV <https://youtu.be/gPfWwfxsQ0o?si=pGaCTPAxrMmXKLr8>

本事業は、文化庁の令和5・6年度博物館機能強化事業（Innovate MUSEUM 事業）の助成を受け実施しました。